慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ハンス・ モテック, ホルスト・ ブルンバーク, ハインツ・ ウッツマー, ウォルター・ ベッカー共著 ドイツ産業革命史研究
Sub Title	Mottek/Blumberg/Wutzmer/Becker; Studien zur Geschichte der Industriellen Revolution in Deutschland
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1963
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.56, No.5 (1963. 5) ,p.440(64)- 447(71)
JaLC DOI	10.14991/001.19630501-0064
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19630501-0064

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

ハンス・モテック
ホルスト・ブルンバーク
ハインツ・ウッツマー　共著
ウォルター・ベッカー

『ドイツ産業革命史研究』

Mottek/Blumberg/Wutzmer/Becker: Studien zur Geschichte der Industriellen Revolution in Deutschland, 1960, Berlin, SS. 240.

飯田　鼎

一

産業革命といえば、直ちにイギリスを思いうかべ、またわが国における産業革命も、主としてこの国をモデルとして研究されてきた。これは経済学研究者の場合、イギリスが、いわゆる「資本主義の祖国」であり、この国についての経済史的知識が、経済学それ自体の研究にとって不可欠の前提となっているからであるといえるであろう。しかし従来、わが国における社会経済史研究の焦点は、「封建制から資本制への移行期」にむけられてきたが、それは、日本の「近代化」という課題が、とくに第二次世界大戦後の民主化過程のなかに、大きくクローズ・アップされてきたという事実の反映であった。

だが最近、社会経済史研究者の間から、産業革命期の研究の重要性が指摘されはじめ、新しい問題意識に立って、従来の研究視角への批判・検討および反省がなされているのは印象的である。[1] 産業革命研究の重要性が指摘された背後には、当然それだけの客観的な根拠があるわけであり、何といっても現代のいわゆる国家独占資本主義段階のもつ根本的な諸問題＝諸矛盾と密接な関係があることはいうまでもない。それは大きく二つにわけることができるのではなかろうか。ひとつは、最近における技術革新の高度化にともなう産業関係および経済政策の変化があげられねばならない。第二次大戦後、いわゆる「第二の産業革命」と呼ばれる一連の技術革新がおこなわれ、具体的には原子力利用とオートメーションとエレクトロニックスとエーロノティックスと新合成物質という五つの焦点をもった技術革新であるが、[2] その規模が大きければ大きいほど、それが経済制度や産業関係あるいは経済政策に及ぼす影響は深刻であり、現在われわれがそうした科学＝技術的変革の時代に生きている以上、時代感覚の鋭敏を誇る経済史研究者の問題意識の上に投影したことは否定できない。

そこでこうした技術革新にともなういちじるしい生産力の発展、新技術の開発という事態は、あたかも十九世紀初頭の産業革命を髣髴たらしめるものがあり、独占資本主義段階に固有な諸特徴・諸変化、そしてそれらが生み出す矛盾や苦悶が、われわれをして、とり

わけ産業革命にたいする関心をかきたてるといっては云いすぎであろうか。しかし、しばしば指摘されるように、産業革命は、産業＝技術上の変革をもって特徴づけられるのみでなく、社会的（＝階級的）体制的な変化と社会経済的な変革とが相互に結びついてあらわれてきたのであって、ここにまた現時点においてことさらに産業革命の歴史的意義が顧みられなければならない意義があると思う。[3]

しかしわたくしは、従来、社会経済史研究者の多くが、産業資本の確立および制覇、封建的地主階級にたいする産業資本家階級の優越という視角からだけ問題を提出してきたのにたいし、いわゆる近代的プロレタリアートの階級的形成の出発点、[4] それゆえまた労働運動をふくめて、ひろく労働問題という資本主義にとってきわめて厄介で困難な課題を生みだした過程として把える。産業資本の確立と賃労働の形成過程は、いわば裏腹の関係に立つものであり、その産業化過程を強調するあまり、産業革命の現代的意義を、いわゆる〝高度成長〟的視点にのみ見出すことの不合理は、それが近代的プロレタリアートの形成とその組織的運動のための諸契機を見失うという非科学的態度におちいらざるをえない。[5] モテック等のドイツ産業革命史にかんする業績は、こうした両者の面を有機的に把握した注目すべき研究の集成であるということができる。

（1）筆者の知る限りでは、北村次一氏が、「経済史学の現代的課題」（経済評論・一九六一年一二月号）で紹介している角山栄氏の提案があるが、「産業革命以前の時代はいわゆる一般の歴史家にまかせ、本来の経済史家は、産業革命およびそれ以後の時代に結集すべきである」という一種の分業論は、一応もっともであるが、にわかに賛成できない。北村氏の紹介によるだけで角山氏の論文は、わずかに目を通した程度にすぎず、且つ角山氏はその後も産業革命論についていろいろ発表しているので、あるいは筆者の誤解もあるかもしれないが、現時点において、何故に、ことさら産業革命を問題にしなければならないかという説明としては充分でないような気がする。これはたんに研究領域の問題ではなく問題意識にかかわることであるが……。

（2）都留重人編「現代資本主義の再検討」一九五八年、三二五頁、岩波書店。

（3）わたくしは、この点については、「歴史学研究」別冊、「現代歴史学の課題」掲載の論文、「産業資本期をめぐる諸問題」の筆者の意見に賛成する。すなわち氏はつぎのようにいわれる。「ヒストリアンとしてのレーゾン・デートル（ここではデーゾン・デートルとなっているが、「存在理由」という意味ならばレーゾン・デートル raison d'être であるので、そのように書き直したことをこの論文の筆者におことわりしておく）は、つまるところ時代の総体的な把握以外にはないのであるから、経済史に片寄ってもいけないし、政治史偏重でもいけない。更には思想史、労働運動史、社会政策史が無視されるようであってもならない……」。これはたんに歴史学研究会のあり方としてあてはまるのみならず、研究テーマが極度に分化してしまって、ともすれば何のためにその問題を追求しているかを見失いがちな歴史研究者の問題意識にもかかわると思うのである。」

（4）大島隆雄氏は、つぎのように指摘される。「われわれ歴史研究者

にとって、産業革命の意味するものは、たんに技術変革の過程だけではない、それは機械制大工業の成立による産業資本の確立過程、近代的プロレタリアートの成立過程等の局面を含む経済的・社会的変革の過程でもある（前掲書「ドイツ産業革命の構造について」但し傍点は大島氏）。

（5）　川久保公夫氏は、「産業革命史研究の課題と方法」のなかで、最近の産業革命史研究の動向を紹介しながら、ロストウの経済成長論が、わが国における産業革命史研究の方法に与える影響およびその弱点を紹介しているが、現代のわれわれにとって重要なのは、現在のいわゆる〝高度成長〟は、産業革命以来、資本主義社会が内包してきた矛盾を解消してしまうのではなく、それどころか国家独占主義時代における高度成長は、その矛盾をますますはげしくする側面をもっているということである。このような深刻な現実にたいするきびしい認識と体験に支えられてはじめて、産業革命研究への正しいアプローチも可能であることを強調しておきたい。

二

本書は、

ハンス・モテック「序論的考察――ドイツにおける産業革命の経過および若干の主要問題について」(Einleitende Bemerkungen――Zum Verlauf und zu einigen Hauptproblemen der industriellen Revolution in Deutschland.)

ブルンベルク「一八三四年から一八七〇年までのドイツのリンネル工業の歴史についての寄与」(Ein Beitrag zur Geschichte der deutschen Leinenindustrie von 1834 bis 1870.)

ブルンベルク「十九世紀五〇年代のドイツにおける株式会社の形における企業の新設および拡大のための資本調達――プロイセンの諸関係を例として」(Die Finanzierung der Neugründen und Erweiterung von Industriebetrieben in Form der Aktiengesellschaften während der fünfziger Jahre des neunzehnten Jahrhunderts in Deutschland, am Beispiel der preussischen Verhältnisse erläutert.)

ウッツマー「十九世紀の四〇年代におけるプロイセンの産業ブルジョアジーの由来」(Die Herkunft der industriellen Bourgeoisie Preussens in den vierzig Jahren des 19. Jahrhunderts.)

ベッカー「ドイツにおける工業プロレタリアートの形成における非農業者の移動の意義――とくに一八五〇年から七〇年までのプロイセンの考察を中心として」(Die Bedeutung der nichtagrarischen Wanderungen für die Herausbildung des industriellen Proletariats in Deutschland, unter besonderer Berücksichtigung Preussens von 1850 bis 1870.)

の五篇の論文から成っている。

われわれはすでに産業革命史をも含むドイツ社会経済史の動向については、たとえば、一九六〇年八月、ストックホルムで開かれた国際歴史研究者会議第一一回大会におけるドイツ民主共和国における歴史的研究(Historische Forschungen in der DDR, Analysen und Berichte, Zum XI Internationalen Historiker-Kongress in Stockholm, August, 1960.)などにおいてうかがうことができるのであるが、最近ドイツ産業資本確立期における力作があらわれつつある。たとえばディートリッヒ・アイヒホルツの「プロイセンの鉄道の歴史における一八四八年以前のユンカーとブルジョアジー」(Dietrich Eichholtz; Junker und Bourgeoisie vor 1848 in der preussischen Eisenbahngeschichte, 1962, Akademie Verlag, Berlin.)やシュレーターやウォルター・ベッカーの「産業革命におけるドイツ機械産業」(Alfred Schröter/Walter Becker; Die deutsche Maschinenbauindustrie in der industriellen Revolution, 1962, Akademie Verlag, Berlin.)などである。注目すべきことは、さきに筆者が問題として提起したように、これらの研究においては、いずれも「賃労働」の形成という視点がきわめて重要視され、社会経済史研究の基本的契機としての資本の蓄積＝産業資本の確立との関連のなかで近代的プロレタリアートの形成およびその存在形態が一貫して追求されていることである。本書においてもベッカーの論文がそれであるが、われわれもこうした接近方法に当然関心をもたざるをえない。

著者のひとりモテックは序文（Vorwort）において、ドイツ産業革命史研究の意義について、「産業革命の理論の深化は、それが、たんに英国における産業革命の事実についてだけではなく、ドイツの産業革命にも基くものであるとするときにのみ、はじめて可能なのである」(S. 8)という主張からも明らかなように、十九世紀初頭における後進国ドイツを、十九世紀末には世界有数の独占資本主義国たらしめたその秘密を十九世紀初頭のドイツの産業化過程のなかに、何よりも実証的に把握しようとしている意欲がはげしく感じられ、その意味では、ドイツ民主共和国が社会主義建設に民族の力を結集するために世界史におけるドイツの役割を積極的に評価しようとする意図とも合致するものとなっている。従って産業革命という問題からしても、また民族的な点からもたえず十九世紀におけるイギリス資本主義の繁栄が意識されているのである。

さて、冒頭のモテックの論文についてはすでにいくつかの論評が行われているので簡潔にふれることとする。この論文は本書全体の序論的部分にあたり、ドイツ産業革命史研究のいわば方法論を展開している。まず著者は、ユルゲン・クチンスキーの産業革命史観の批判から出発する。すなわち、生産手段の上での変革の過程として、つまり社会経済的変革(die sozial-ökonomische Umwälzung)の視点を偏重する見方にたいして、「熔鉱炉および製鋼処理による冶金の分野およびポンプと運搬に応用された蒸気機関による鉱山における技術的変革の重要性も、産業革命の一部として(als Teil der industriellen Revolution)として正しく評価する」(S. 12)としているのは興味深い。そしてさらに、「決定的に重要なことは、産業革命、従って産業資本の展開の過程のために、新しい技術を基盤として、たえず固定資本を投下すること」(S. 17)とのべているように、産業革命というものを、「蒸気機関の発明をはじめとして一連の技術的変革にともなう社会経済的変化」という従来の定説によって把える観点にたいして、「たえざる固定資本の投下」(die Anlage von konstantem fixen Kapital)を対比せしめることにより、当時のドイツ産

業資本の性格を正しく評価しようとする努力が払われている。イギリスよりも半世紀もおくれて資本主義への途をスタートしたといわれるドイツの産業資本は、二つの緊急な課題の前に立たされていた。ひとつは、ドイツの繊維産業をしてイギリスとの競争による破滅からまぬかれしめることとそのための新技術の導入、そして第二には、急速な資本蓄積による製造・運輸・交通・鉱工業部分の発展と国内および国外における市場の開拓であって、ドイツの悲劇は、この両者を並行して強行しなければならなかったし、この矛盾はやがて一八七三年恐慌以後の独占資本主義にもっともはげしくなるのであった。そしてまたこのようなドイツ産業資本の特殊性が、一八七三年恐慌を契機として国家による金融資本にたいする手厚い保護とその産業資本との癒着を早速に実現させることとなるのである。

著者は、産業革命の過程を通じて生産財生産部門（第一部門 Abteilung I）にたいする消費財生産部門（第二部門 Abteilung II）の発展の優位、両部門の格差がますます大きくなるという考え方を否定し、「生産手段や機械が主として製造されなければならなかったドイツにおいても、生産手段製造業（Produktionsmittelindustrie）のより急速な発展の場合に、軽工業の発展も自然に可能であり、この事実は、英国においてよりもよりよくドイツに妥当する」（S. 47）。このように著者は、産業革命の過程において軽工業部門の発展がたえず生産財生産部門に先立ち、しかもその両者の相互無関係的な格差の漸次的拡大という公式的解釈にたいして、むしろ生産財生産部門の急速な増大が、産業革命の過程を通じて――たとえば運輸部門の発展にみられるように――とくに鉄道建設を通じてあらわれ、またそのような生産財＝運輸部門の発展が消費財生産＝軽工業部門の発展を促進したことを論文全体にわたってくり返し強調している。

著者はドイツ産業革命史の発展過程を生産財生産部門にたいする消費財生産部門の優位、前者の後者にたいする従属的地位の機械論的な解釈に反対し、この両者の相互発展的な関係にたいする有機的理解を提唱しているのであるが、最後にドイツ産業革命の終末について、一八七三年の恐慌を画期としてあげている。すなわち㈠ドイツの労働者階級が、ある程度の成熟の段階に達するとともに、このことはまたブルジョアジーについても妥当したこと、㈡第二部門――軽工業部門に劣らず第一部門――重工業部門および機械産業――が充分に発展したことをその道標として把握し、一八七三年はドイツ資本主義の歴史における質的な新しい段階――自由競争的段階から独占段階への移行の始期として特徴づけられている。産業革命の終末期としての著者の把握は、「大工場の中小工場にたいする闘争」（Kampf der grossen Fabrik gegen die mittlere und kleine Fabrik）が、「手の労働に依存している小経営にたいする工場の闘争」（Kampf der Fabrik gegen das auf Handarbeit beruhende Kleingewerbe）にたいして優越した重要性をもつとしているのは面白い。要するにこの論文は、従来の産業革命史研究における公式的ないし機械的解釈論にたいして、ひとつの問題を提起している。そしてこのあとの論文は、この方法論に依拠している。

ブルンベルクの論文は、一八三四年から一八七〇年、独占資本主義形成期までのドイツのリンネル工業の歴史を対象としているが、これは、最初は農民の副業として発展したリンネル業が、一八四六年頃には繊維産業の主位をしめ、やがて一八五〇年代におけるその停滞、とくにイギリス綿紡績業とさらにそれに刺激されておこったドイツ亜麻紡績業は家内手工業的なリンネル業を破滅させる過程を、豊富な資料によって克明に追求している。著者のこの論文における第一の力点は、外国市場の獲得におくれをとったドイツのリンネル産業は、家内工業を破滅させ、独占化をおしすすめ、国内市場をめぐってイギリスとの間にはげしい競争を展開しながら、国内市場における不利を海外市場において補おうとするドイツ・リンネル産業の市場をめぐる矛盾である。しかし、アメリカおよび西インド諸島、とりわけアメリカ合衆国市場における英仏との競争の激化、その後退、そしてスペインやイタリーの喪失によって、結局、ロシアおよびスカンディナヴィア諸国で満足しなければならなかった。第二には、農民にとって、副業として重要な工業生産であったリンネル産業は、その衰滅の過程を通じて、ドイツのプロレタリアートの創出に大きく貢献したことである。とくに一八三〇年代の好景気をへて、多くの農民は、従来農耕にたいする副業として営んできたリンネル織りを、逆に農耕を副業とする完全な職業として従事するに至った（SS. 124～126）。しかし勃興する綿工業によって――たとえば綿織物業によって労働力をひきぬかれ、またリンネル紡績工場で働く労働者の賃金は綿紡績業の半分ないし三分の一であるということ――不利な立場にたたされたリンネル産業は、きわめて望みうすいものとなった。一八四四年におこったいわゆる織匠一揆などもこうしたリンネル織工の苦悩を物語っている。著者は、リンネル産業とくに織工の低賃金構造をつぎのように分析する。㈠十九世紀初頭まで支配的であった農奴制度（Leibeigenschaft）とそれと結びついた賦役制度、㈡主として婦人および子供を基幹労働力とする副業的存在、㈢織工同士の競争の激化、しかしながらより基本的な要因としては、㈠ドイツのリンネル産業の世界市場における困難な販売条件、㈡ドイツ資本主義発展のたちおくれを克服するために織工の賃金のきり下げ――ダンピングがあげられる。

一八七〇年代までのドイツ産業革命をもっともよく象徴しているリンネル産業の矛盾の過程を手際よく整理しているが、この論文の特徴はそれらをあくまでも国内的・国際的な二つの側面から追求していることである。すなわちドイツのおくれたリンネル産業は、㈠ドイツの機械化されつつある木綿工業、㈡外国とくにイギリスのリンネル産業という二重の圧迫のもとで、独占段階に至るまで、ますますその矛盾を深めてゆくことになる。しかし、モテックのいわゆる生産財生産部門（第一部門）にたいして、消費財生産部門（第二部門）の代表ともいうべき繊維産業のリンネルがどのような関係があったのか、あまり問題にされていないのは惜しまれる。

すでに与えられた紙面がつきてしまったので、最後にウッツマーの「十九世紀の四〇年代におけるブロイセンのブルジョアジーの由来」をとりあげてみたいと思う。

ドイツの資本主義の発展は、マルクスによって、いわゆる「プロ

シア型」と呼ばれ、商人が旧来の生産方法を破壊するのではなく、その上に立ってそれを利用して産業資本家に転化するというきわめて妥協的な途を辿ったのであるが、同じプロイセンでも、ライン州とシュレジェン州では綿工業を中心として、産業ブルジョアジーが力強く発展した。著者は、一八四〇年代ケルン地区の綿紡績業者エルメン・エンゲルス商会や、手工業者出身のオベレント (J. A. Oberempt)、ウェストファーレンの商人ソュメールダー (Schmölder)、あるいは亜麻製造業者の系譜を辿りながら、「ドイツのブルジョアジーの決定的な部分は、工場主であった」というエンゲルスの規定を支持している (S. 145)。

ところで生産財生産部門、たとえばライン河畔の石炭業のハニエル (F. Haniel) やスティンネス (Stinnes) などは商人出身であり、またアルフレッド・クルップ (Alfred Krupp) のような鉄鋼業者もまた富裕な商人出身であったことは、ドイツ産業資本の性格を物語っている。だが生産財部門の中核ともいうべき機械産業は、ライン州および西部ドイツに強力に発展し、著者によれば機械産業の経営には二つの型があった。ひとつは、他の産業部門に属している経営の生産部門 (Produktionsabteilung) を代表し、鉄鋼所の構成部分でありながら、繊維産業の修理工場として一連の機械産業が成立した。デュッセルドルフ地区のレンダースドルフのホェーシュ (Hoesh in Lendersdorf im Regierungs-bezirk Düsseldorf) やアルンスベルク地区のルール、ウェッターのカンプ、同じルールのミュールハイムにあるドイスおよびモルの機械工場 (die Maschinenbauanstalt von Kamp in Wetter an der Ruhr im Regierungs-bezirk Arnsberg und die Maschinenbauanstalt von Deus und Moll bei Mühlheim an der Ruhr) であった。そして機械産業経営の第二のタイプは、独立の専門化した設備を代表し、そのなかには、鋳鉄製の機械の部品の製作のために、それ自身の鋳造所をもっている企業をも含むのであって、ディネンダール (F. Dinnendahl)、ウールホルン (D. Uhlhorn in Grevenbroich)、ズィーゲンのエッヘルホイゼル (W. Oechelhäuser in Siegen) などの機械工場があった (SS. 151-152)。

以上のように、著者によれば、繊維産業にみられたように、商人がいわゆる問屋制資本家をへて産業資本家になるという経路と、機械工業にみられるように商人または手工業者 (Handwerker) あるいは農民からというようにさまざまな過程からの鉄鋼業資本家への上昇過程が指摘されるわけである。あるいはまたドイツ特有のユンカーから産業資本家への転化という現象も珍しくなかったのであって、とくにシュレジェン州では、資本主義発展の「プロシア的な途」がみられ、封建的な土地貴族が、製鉄業経営に関係したこともあった。(S. 155) これを要するにドイツにおける産業ブルジョアジーはその地域および産業などによって、さまざまな階層から出ているのであるが、概して独立生産者が資本を蓄積して産業資本家になるという、マルクスのいわゆる「革命的な方法」は機械産業においてわずかにみられた程度にとどまり、大体において、シュレジェンに特徴的にみられるような「プロシア型」を通じて、商人や封建的諸階級が産業資本家に転化していったというのが、著者の見解のようである。その意味では通説を覆すほどの目新しい問題は提起していないが、非常に具体的に各地方の産業資本の相異を実証的に明らかにしながら、産業ブルジョアジーの差異を明確に分析しているのはまことに興味深い。

筆者の不手際のために、このすぐれた業績の全貌について紹介批評することができず、とくに最後のベッカーの論文についてふれることができないのはきわめて残念であるが、読者がこれによって、ドイツ産業革命史研究における問題の所在を、いくらかでも知ることができれば幸である。また筆者は、この研究に触発されて、いまドイツ賃労働史研究への一歩をふみ出そうとしている。(Akademie Verlag, SS. 240. ¥ 1950.)

J・ティンバーゲン著

『世界経済の形成』

Jan Tinbergen, Shaping the World Economy —Suggestions for an International Economic Policy—, The Twentieth Century Fund, New York, 1962, pp. 330.

深海博明

〔一〕

現在世界経済が転換期または変革期にあることは通念となっており、内外において数多くの分析がなされている。(注1) とくに最近は、EECを中心とする地域的経済統合化傾向が、関心の焦点となっている。しかし、この世界経済の現状を正しく把握し、その将来を左右する要因を探り、積極的に真の国際経済・世界経済形成のための諸提案を打ち出した総括的な分析は、殆ど行なわれていない。

本書は、その題名『世界経済の形成』——国際経済政策への諸提案——よりも明らかな如く、従来の分析の欠陥を見事に補い、世界経済の問題点・決定要因を解明し、とるべき方策を明示し、世界の平和と厚生の増大に貢献せんとする有意な研究である。

「技術的能力とモラルパワーとの間の大きなギャップの存在に特徴づけられている世界は、世界を新しく形成し、その切迫した問題を解決するためのフレームワークを作り出す政策をまさに必要としている。本書は、その必要性を分析し、それを満たすための諸手段の建設的な提案を行なおうとする一つの試みである」(p. 4) ごとく、本書のすべては、世界経済の現状・諸緊張の正しい分析と、これにもとづく政策提案・我々が準拠すべき新しい世界経済秩序の樹立に向けられている。

本書は、二十世紀基金 (The Twentieth Century Fund) の提唱により行なわれた、ティンバーゲンを長とするオランダ経済研究所の八人のスタッフと二人の特別顧問の共同研究の所産であるが、若干の特別な節と付論を除いては、ティンバーゲン自身の筆になるものである。

著者のティンバーゲンについては、今更紹介する必要もないが、(注2)